

顔とemojiのフィールドワーク

異分野融合のフィールド実験で「顔を見る／読む／描く」に挑む

高橋康介

たかはし こうすけ / 中京大学

田 暁潔

でん しょうち / 筑波大学

大石高典

おおいし たかのり / 東京外国語大学

島田将喜

しまだ まさき / 帝京科学大学

錢 琨

せん こん / 九州大学

顔と名前を覚え／覚えられることは、人を対象としたフィールドワークには欠かせない。

人が顔に表れる感情を受け取り

理解するやり方には、どの程度の普遍性と文化差がみられるのだろうか？

「フィールド実験」ができるまで

—— 実験屋とフィールド屋の協働

フィールドワーカー（以下、フィールド屋）は、現地の人々と付き合い、交渉を繰り返す中で、相互行為の文脈に応じた表情や身振りを学習していく。彼／彼女の表情もまた、ふるまいの一部として現地の人々の観察対象になる。認知心理学、霊長類学、生態人類学を専門とする私たちは、アフリカ（タンザニア、カメルーン、ケニア）、北欧（フィンランド）、東南アジア（タイ）、

日本をフィールドに顔認知や顔表情を多文化間で比較・検討する共同研究をおこなってきた。ここではそこの発見に触れつつ、分業ではなく融合による異分野間の共同研究の可能性について紹介したい。

最初に私たちのプロジェクトの沿革を簡単に紹介する。フィールド屋と認知心理学者（以下、実験屋）の協働が始まったのは今から10年ほど前である。毎年タンザニアに滞在し野生チンパンジーの研究をしていた島田（霊長類学）と実験室の中でヒトの認知に関わる心理実験に勤しんでいた高橋（認知心理学）の間で、フィールドの中に認知心理学の手法を持ち込んで実験研究を展開するというプロジェクトが始まった。2人は、学部時代には徹夜で麻雀に打ち込んだ仲であったが、当初はまさに試行錯誤の連続であった。心理学の実験室では当たり前のようにできていたことがフィールドでは通用しなかったか

らだ。

例えば、あるタンザニアの村人に「紙と鉛筆を用いて、ある概念と一致する別の概念を線でつなぐ」という実験への協力をお願いしたところ、「線でつなぐ」という行為が「怖い」と警戒され、受け入れられず、失敗に終わった。しかし、状況はタブレットをもちいることで一変する。軽量のタブレットは携帯が容易で、1回の充電で10時間以上も使用ができる。画面を見ながら指で触るだけで操作ができるので、電源が安定せずPCが普及していない都市から離れた場所でも、実験を実施するハードルが低くなった（図1）。

さらにカメルーンの熱帯林をフィールドに狩猟採集民や焼畑農耕民の研究を行なっている大石（生態人類学）が加わったことで、東西アフリカで同じ調査を行なうことが可能になった。この頃、議論したのが研究テーマである。フィールドでの実験



図1：タンザニアでのフィールド実験風景（撮影・島田将喜）。

には制約がある。フィールドの利点を最大限に活かし、かつ実行可能なテーマは何か？ 人類が普遍に持っている「顔」に注目することになった。その後、科研費の新学術領域研究（「質感」および「顔身体」）への参加や、成果論文の公表を経て、銭（心理学）と田（生態人類学）が仲間に加わった。こうして、アフリカの一部と日本だけの比較から、複数大陸における多文化間比較研究へと発展していった。

実験屋とフィールド屋が相互に乗り入れる研究過程で、協働の形態がダイナミックに変わり続けてきた。当初は実験屋が仕込んだタブレット装置を使ってフィールド屋が自身の本業調査の合間にデータを取り、帰国後に高橋がそれを分析するという分業体制を取っていた。しかし現在では実験屋の高橋や銭がフィールドワークを

おこなう一方で、島田、大石、田らフィールド屋も実験の過程で現れるオモロイことを見出している。実験屋とフィールド屋が緩やかに課題を共有しつつ、異なる視点から同じ「フィールド実験」の場を眺め、その経験を日本に持ち帰り、実験データとともにフィールド実験の場で生まれる新たな発見について議論し、次の研究へつなげる。そんな越境的異分野融合がまさに進行中なのである。

フィールド実験で明らかになった emoji の感情の文化依存性

——スマイリーは誰にとっても笑顔に見えるのか？

共同研究で得られた成果をひとつ紹介したい (Takahashi et al., 2017)。私たち（ところで「私たち」とは一体誰なのだろう

か？）は☺（スマイリー）のような絵文字を見て、容易にその感情を読み取る。ではスマイリーは通文化的なものなのだろうか？ そんな単純な疑問から、タンザニア、カメルーン、日本の3地域でフィールド実験を行なった。実験は、タブレットに出てくる顔写真や絵文字が笑顔なのか悲しい顔なのかを判断するという内容である。結果は予想外の驚くべきものだった。顔写真では文化依存性はほとんど見られず、どの地域でも笑顔は笑顔として認識される。ところが、絵文字の場合にはタンザニアとカメルーンではこちらが想定した感情が読み取られないことが多くあった (図2)。端的に言えば、☺が笑顔に見えないのである。

その後、なぜ☺が笑顔に見えないのかを探る中で、この話はさらなる展開を迎えている。翌年のフィールド実験では、図式化された笑顔を描画するという描画実験を行なった。すると日本では多くの場合、目・目・口の3部位で顔が表現された（これは、認知心理学の知見から容易に予想できる結果である）のに対し、タンザニアやカメルーンでは鼻（しかも点や丸のようにシンプルなものでもなくかなり具体的な）や鼻梁眉弓線など、目と口以外の部位も多く描かれた (図3)。この問題の探究は進行中だが、現在では顔の図式化や記号化の形態、ひいては顔認識の枠組み——つまり顔の中の顕著な特徴を伝えるもの——に文化依存性があるという予備的結論に至っている。こう考えると、☺が笑顔に見えないのは不思議ではない（目・目・鼻に見えていたら笑顔の手がかりはない）。

ところで、フィールド実験の場には実験データとしては浮かび上がらない多くの発見がある。絵文字と描画のフィールド実験から、フィールド屋は実験の枠組みをはみ出して展開される語りや相互行為の世界に関心を持った。例えば☺のような図式的な顔は私たちから見れば顔の記号に過ぎない。

ところがフィールドでの語りの中からは、しばしば異なるモードの解釈が見られた。例えば大石によるカメルーンの調査では、農耕民バクエレの男性は極度に細部が単純化された顔であるスマイリーは「死んだ後の顔」であるとつぶやき、別の狩猟採集民バカの少年は「(具体的な個人名)がぼーっとしているところ」だと解釈した。1

図2：絵文字実験の結果。顔写真（左）に対する表情判断はどの地域でも似通っていたが、絵文字（右）では地域間で大きな違いが見られた。

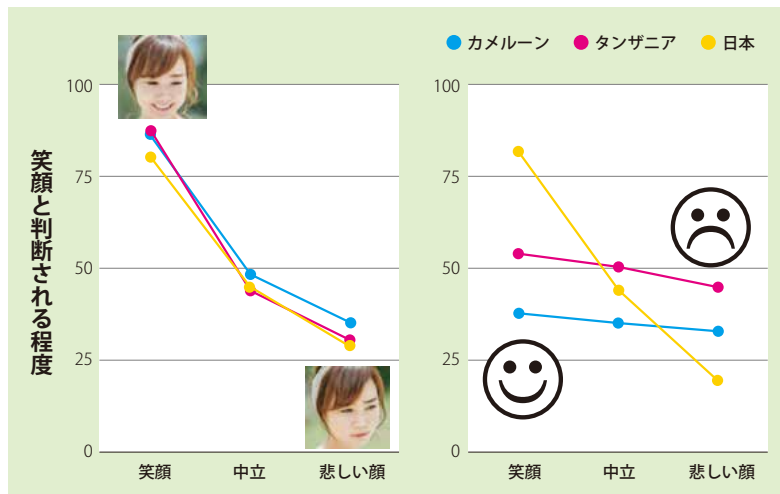


図3：様々な地域で描いてもらった笑顔のイラスト（左からタンザニア、カメルーン、フィンランド、日本）。



図4：マサイによる描画イラストのサンプル（左から順番に：点線の顔、イヤリング付きの顔、手足付きの顔、手足・体付きの顔、手足・体・内臓付きの顔）。

枚の顔写真を見て、30分間即興でストーリーを語るバカの男性もいた。顔をどう見るのか、フィールドでは文脈に応じた脱記号化が起こる。フィールド実験は、すでに記号化された顔に慣れ親しみすぎた私たちからは決して知り得ないような、顔を記号として表すという行為それ自体の意味と多様性について再考するきっかけとなっているのである。

顔認知から「描画」研究への展望

— 顔を描く／描かれること

田によるケニアの牧畜民マサイを対象としたフィールドワークでは、主に農耕民、狩猟採集民、都市生活者を対象にしてきた他のフィールドでは見られないような「顔」が出てきて私たちを驚かせた。例えば、写真をもちいた描画テストでは、描画経験がほとんどないマサイたちが提示された女性の顔写真を見ながらスケッチする課題に取り組んだ。マサイは、顔より写真にある女性の全身を描き、よく「彼女はどこからの旅人？ 彼女は何をしている？」と田に質問した。どうして全身まで描くのか尋ねると、「見たのは人間だから、体と手足があるのは当然でしょう！」と当たり前のように返事が返ってきた。顔と身体を切り離して捉える自身の思い込みを指摘された田はたじたじとなった。マサイが描画した顔のスケッチには、手足のみならず、内臓まで描き込まれているものもあった（図4）。このような経験を繰り返すなかで、私たちは顔とその認知について再考するためには、「顔を描く」行為そのものを対象にしたフィールドワークが有効ではないかと考えるようになった。

フィールドでもちいたのとはほぼ同じ方法



図5：東京外国語大学・アフリカンウィークスでのイベント「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」（2019年12月6日）での描画風景。参加者には、組になって顔を描き合ってもらった（撮影・銭瑛）。

を使って、日本でおこなった顔・身体学プロジェクトの「哲学カフェ」や東京外国語大学の学生による「アフリカンウィークス」との協働イベントでは、参加者と対面的な顔の描画実践をおこなった（図5）。描画は描く側と描かれる側の挨拶からスタートし、「あ～、失敗した!」、「え～、似てなくて変な顔になってしまって、ごめんね!」などの謝りの連発で続いていった。このような会話の背景には、「顔を正確に、きれいに描かなければ」という暗黙の社会的認知がある。ここでも、顔の描画が社会的な営為であり、認知の枠組み（基盤スキーマ）に支えられていることが確認できる。

最後に、今後の私たちの研究について方向性を示したい。「顔」が誰にとっても普遍的な記号として存在するはずだという思い込みへの批判的な自省から再出発した

い。そのために、異なる地域で同様におこなえる実践方法を工夫し、マルチサイトッドなフィールドワークをおこなう。フィールド実験は、タブレットやスケッチブックといった道具立てに媒介されつつ、調査者を含む参与者たちによるトランスカルチュラルな相互交渉の場となる。そこで生成する顔についての人々の相互行為そのものを研究対象とすることで、社会的な営為の中に生成しつづける動的な顔を捉えることができるはずだ。



参考文献：Takahashi, K., Oishi, T., Shimada, M. (2017) "Is (^_^) Smiling?: Cross-cultural Study on Recognition of Emoticon's Emotion" *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48(10): 1578-1586. doi: 10.1177/0022022117734372